

総称と同定*

——ヘブル語代名詞的コピュラと日本語同定文 (Generics and Identification : Pronominal Copulas in Hebrew and Identificational Sentences in Japanese)

岩 部 浩 三

1. 序論

岩部 (2021) では, Greenberg (1998, 2002) に基づきながら, ヘブル語における代名詞的コピュラと総称文の関係を論じ, 代名詞的コピュラ (H型) と日本語の「というもの」という表現の類似性が浮かび上がってくることを述べた。そこでは, 同定文は総称文ではない, とする Greenberg の主張の問題点も論じたが, 同定文をさらに深く吟味するには, もう一つの代名詞的コピュラである Z 型の分析が必須である。Greenberg (2008) によれば, ヘブル語の Z 型代名詞的コピュラは同定を表すものであるからである。

以下, 第 2 節では岩部 (2021) で扱った H 型代名詞的コピュラについて復習し, 第 3 節で Z 型について論じる。それらをふまえて, 第 4 節では同定文と総称の問題に立ち戻って考察する。

2. ヘブル語の H 型代名詞的コピュラ

Greenberg (2002) は, ヘブル語の代名詞的コピュラのうち, H 型代名詞的コピュラ (PronH) が総称文に対応する文法形式である, との主張を行っている。つまり, 総称文と PronH 構文を一对一に対応させようという趣旨である。これについては, 岩部 (2021) ですでに論じたところであるが, 本論の主要なテーマである Z 型代名詞的コピュラ (PronZ) と比較するためにも, 以下に概略をまとめておく。

まず例文 (1) のように, 過去形や未来形では動詞的コピュラが生じるが, 現在形においては (2) に見られるように PronH が用いられるか, (3) のようにコピュラが省略される。

- (1) a. Dani haya xaxam. (過去形)
 'Danny was wise.'
 b. Dani yihye xaxam. (未来形)
 'Danny will be wise.'
- (2) a. Dani hu gavoha. (現在形3人称男性単数)
 Danny PRON(3MS) tall
 'Danny is tall.'
 b. Rina hi xaxama. (現在形3人称女性単数)
 Rina PRON(3FS) smart
 'Rina is smart.'
 c. ha'etim Seli hem kxulim. (現在形3人称複数)
 the pens mine PRON(3PL) blue
 'My pens are blue.'
- (3) Dani xaxam.
 Danny wise
 'Danny is wise.'

現在形における PronH の随意性については Greenberg の論考においても不明確な部分が多いが、義務的に生じる場合や義務的に削除される場合ははっきりしている。(4)に見られるとおり、明白な総称文においては PronH が義務的に生じ、(5)のように一時的な事態を示す場合には義務的に削除されるからである。

- (4) 'orvim *(hem) (yecurim) Sxorim. (義務的)
 ravens PRON (3PL) creatures black
 'Ravens are black (creatures).'
 カラスというものは黒い (ものだ)。
- (5) Dani (hu) 'ayef 'axSav. (義務的削除)
 Danny PRON(3MS) tired now
 'Danny is tired now.'
 ダニーは今疲れている (ところだ)。

また、述語が個体レベル (individual-level) であって永続的な属性を表す場合であっても、(6b)のように主語が限定されている場合には PronH が随意

的になるという直観を Greenberg は示している。

- (6) a. zmaxim *(hem) yerukim. (義務的)
 plants PRON(3PL) green
 'Plants are green.'
 植物というものは青い。
- b. ha-zmaxim ha-elu (hem) yerukim. (随意的)
 the plants the these PRON(3PL) green
 'These plants are green.'
 これらの植物は青い。

注目すべきは、例文 (4) において、補語形容詞に名詞 yecurim (=creatures) を補おうとしている点である。総称文であることを明確にするために、無意識に同定文を利用しようとしているのである。このように同定文は総称と相性が良く、同定文は総称文の一つであると私は考える。それに対して、Greenberg (2002) は「同定文はたとえ PronH を含んでも総称文ではない」と論じている。PronH は総称文と一対一に対応する文法標識である、との主張を行う彼女にとってはきわめて不都合であるにもかかわらず、である。Greenberg が同定文を総称文から除く根拠は (7) のような例にある。

- (7) ha-yom ha-'axot ha-toranit *(hi) Rina. (義務的)
 the day the nurse the duty PRON(3FS) Rina
 'Today the duty nurse is Rina.'
 今日、当直看護師はリナだ。

(7) は今日一日かぎりのことを述べているという点で総称文ではないとする。彼女にとっては、時間（および可能世界）を超えて成立することが総称文の条件だからである。しかし、他の一時的な事態を表す文においては (8) のように PronH が現れないのが通例であるため、Greenberg は同定文における PronH の起源を総称とは別のところに求めざるをえなくなっている。

- (8) ha-yom ha-'axot ha-toranit *(hi) 'ayefa. (義務的削除)
 the day the nurse the duty PRON(3FS) tired
 'Today the duty nurse is tired.'

今日、当直看護師は疲れている。

確かにリナという人が当直看護師であるのは今日一日限りのことかもしれない。しかしながら、同定文において主語の属性と補語の属性が重なりあう時間が存在することは必須の条件ではない。岩部 (2021) で論じたように、(9) においてはジキル博士とハイド氏は相補分布をなす属性であって、重なり合うことはないはずである。すなわち、主語と補語の属性の同定は重なりあう時間とは別のところで保証されなければならない。¹

(9) ジキル博士はハイド氏だ。

事情は (7) においても同様であり、たまたま今日一日属性が重なったということは同定文の成立にとって大きな意味を持たない。すなわち Greenberg が同定文を総称文から排除する根拠はくずれ、むしろ同定文は総称文を担う有標の構文として位置づけ、その特性を吟味すべきである。この点については、第 4 節で再度論じたい。

3. Z型代名詞的コピュラ

Greenberg (2008) は、もう一つの代名詞的コピュラである Z 型代名詞的コピュラ (PronZ) を論じている。例文 (10) (11) では、PronH も PronZ も同じような使われ方に見えるが、実は両者には大きな違いがある。

(10) dani hu / ze xaver tov Seli
 Danny.MSC H.MSC / Z.MSC friend.MSC good.MSC mine
 Both: 'Danny is a good friend of mine.'

(11) rica hi / zot pe'ilut bri'a
 running.FEM H.FEM / Z.FEM activity.FEM healthy.FEM
 Both: 'Running is a healthy activity.'

Greenberg が PronH との違いを次のような表にまとめているので、それに従いつつ 3. 1. - 3. 4. 節において PronZ の概略を整理する。

(12)

	Semantic relation (based on Heller (2002))	Direction of agreement (Sichel (1997))	Special constraints (A modified version of Berman (1978))
pronH	Predication	To the left - with the pre-copular element	None
Agreeing pronZ	Equation	To the right - with the postcopular element	None
Nonagreeing pronZ	Equation	No agreement - appears in a fixed neutral form ('ze')	Cannot equate [+human] denoting expressions

(Greenberg (2008: 179))

3.1. 代名詞的コピュラの一一致の方向性と非一致型 PronZ

まず始めに, PronH が左側の主語に一致するのに対して, PronZ は右側の補語に一致する。例文 (13) では主語が女性形, 補語が男性形であり, (14) では逆に主語が男性形, 補語が女性形であるが, PronZ は右側にある補語名詞に一致することがわかる。

- (13) rica hi / *zot hergel mecuyan
 running.FEM H.FEM / Z.FEM habit.MSC excellent.MSC
 'Running is an excellent habit.' (左方一致)
 ランニングは優れた習慣だ。

- (14) iSun *hi / zot peilut mesukenet
 smoking.MSC H.FEM / Z.FEM activity.FEM dangerous.FEM
 'Smoking is a dangerous activity.' (右方一致)
 喫煙は危険な活動だ。

次に補語が形容詞のみで, 名詞を含まない場合を見てみよう。(15a) では主語が男性形であるため違いが見えにくくなっているが, (15bc) のように主語が女性形の場合は違いがはっきりする。

- (15) a. iSun hu / ze mesukan
 smoking.MSC H.MSC / Z.MSC dangerous.MSC
 'Smoking is dangerous'

喫煙は危険だ。

- b. clila hi / *zot mesukenet
 diving.FEM H.FEM / Z.FEM dangerous.FEM

'Diving is dangerous.'

ダイビングというものは危険だ。

- c. clila ze mesukan
 diving.FEM Z.MSC dangerous.MSC

'Diving is dangerous.'

ダイビングは危険なものだ。

(15b) のとおり, PronH は主語に一致し補語形容詞も女性形となる。PronZ は補語名詞があった場合はそれに一致するのであったが, ここでは補語が形容詞だけである。そして, その形容詞を主語に一致させてはならない。一致がない場合, ヘブル語ではデフォルトの男性形が現れる。これが表 (12) における非一致型代名詞的コンピュータ (Nonagreeing PronZ) である。注目すべきは, Greenberg が PronZ に対して同定という意味関係だけを与えている点である。(15c) は [ダイビング] を [危険なもの] と同定しているのである。これは, (14) において「[喫煙] は [危険な活動] だ」というように, 2つの名詞を同定関係でつなぐのと同じである。言い換えれば PronZ は日本語の「ものだ」構文 (16b) の根底にあると思われる同定文 (16a) に相当するのではなからうか。

(16) a. [犬] は [賢いもの] だ。

b. 犬は賢い [ものだ]。

「ものだ」がモダリティ化した (16b) に不自然さはないが, 同定文 (16a) においては犬をモノ扱いする点にやや不自然さを感じられるかもしれない。「犬は賢い動物だ」のように補語名詞を使った方が自然である。次節で述べるように, これと類似の現象がヘブル語にも見られる。

3.2. 非一致型 PronZ の意味制約

Greenberg (2008) が表 (12) で示しているように, 非一致型 PronZ には主語が人を指せないという制約がある。すなわち主語が人である場合, PronZ は使えない。対応する日本語でも, 同定文として解釈すると不自然

である。

- (17) student ca'ir hu / *ze 'aclan
studnet.MSC young.MSC H.MSC / Z.MSC lazy.MSC
'A young student is lazy.'
*若い学生は [怠惰なもの] だ。(PronZ に対応する日本語訳)

他方、補語名詞を伴う一致型 PronZ の場合にはこの不自然さが見られない。日本語も同様である。

- (18) student ca'ir hu / ze yecur 'aclan
student.MSC young.MSC H.MSC/Z.MSC creature.MSC lazy.MSC
'A young student is a lazy creature.'
若い学生は怠惰な生き物だ。

PronZ は、たとえ補語名詞がなくても必ず同定を表す。その場合、(17) に見られるように日本語の「もの」に相当する内容を補っていると考えられる。Greenberg の次のような主張もこれを裏づけているであろう。

- (19) The hypothesis I suggest is that in order to get an equative interpretation for the PronZ, a null noun is inserted into the semantic structure that the postcopular AP modifies.
(PronZ に対する同定解釈を得るために、コンピュータ後の形容詞句が修飾する空の名詞が意味構造に挿入される、というのが私の示したい仮説である。)

(Greenberg (2008: 180))

実際、ヘブル語の PronZ は日本語の「ものだ」構文の元となる同定文に対応する、という我々の見立ては十分に妥当なものであろう。

3.3. PronZ における拡張解釈

PronZ は拡張解釈を許すと Greenberg (2008) が指摘している。例文 (20) において、PronH では VCR そのものが高価でなければならないが、

PronZ では多様な解釈が可能であり、例えば VCR そのものは安くてもその修理費用が高かったり、結婚式のビデオ撮影が高価であったりした場合にも使えるという。

- (20) video hu / ze yakar (Heller (1999: 113))
 VCR.MSC H.MSC / Z.MSC expensive.MSC
 ビデオは高い (ものだ)。

PronZ の拡張解釈は可能性であって、拡張されない解釈も可能である。例えば、(21) では PronH も PronZ もほとんど変わらない意味解釈を受ける。

- (21) sukar hu / ze matok
 sugar.MSC H.MSC / Z.MSC sweet.MSC
 ‘Sugar is sweet.’
 砂糖は甘い (ものだ)。

ただしそれは主語が人間以外の場合であって、主語が通常人間を指す名詞の場合には PronZ の拡張解釈が義務的になる。(22) の PronZ は非一致型であり、主語が人そのものを指すことができないため、拡張解釈によるしかないからである。そこで、例えば「若い学生を指導することは面白いものだ」のような拡張解釈が与えられる。

- (22) student ca'ir hu / ze me'anyen
 student.MSC young.MSC H.MSC / Z.MSC interesting.MSC
 ‘A young student is interesting.’
 若い学生は面白いものだ。

日本語でも「[若い学生] は [面白いもの] だ」という純然たる同定の解釈では、人をモノ扱いするという不自然さが感じられるが、「ものだ」がモダリティ化した解釈では不自然さが感じられない。「ものだ」のモダリティ化には、ヘブル語における拡張解釈の背後にあるメカニズムと同様のものが働いているのかもしれない。他方、学生自身の性質を述べることが求められる(23) の文脈では PronZ は許されない。

- (23) student ca'ir hu / *ze me'anyen, 'aval 'oved le'at me'od
 student young H / Z interesting but works slowly very
 'A young student is interesting, but works very slowly.'
 若い学生は面白いが、働きぶりはのろい。

しかし補語名詞がある場合は、主語が人間であっても拡張解釈は必ずしも求められない。一致型 PronZ では主語が人そのものを指すことが可能だからである。

- (24) student ca'ir hu / ze yecur me'anyen, 'aval 'oved le'at
 Student young H / Z creature interesting but works slowly
 'A young student is an interesting creature, but works slowly.'
 若い学生は面白い生き物だが、働きぶりはのろい。

Greenberg (2008) によれば、拡張解釈は一致型 PronZ でも可能であるが、PronH では不可能だという。例えば、(25) の 3 種類の Pron を (26) のように日本語訳してみた。

- (25) ha- student Se-Salaxta li hu / ze / zot cara crura
 the student that you-sent me H.MSC/Z.MSC/Z.FEM pain.in.the.neck.FEM
 'The student you sent me is a pain in the neck.'
- (26) a. 君が送ってくれた学生は困りものだ。
 PronH (拡張解釈不可)
- b. 君が送ってくれた学生は困ったものだ。
 PronZ.FEM (拡張解釈可)
- c. 君が送ってくれた学生には困ったものだ。
 PronZ.MSC (拡張解釈必須)

(26a) は PronH (hu) の場合で、学生の出来が悪いという文字通りの叙述的な解釈だけが許され、(27) を後続させることができる。

- (27) ... hu 'aclan, gas.ru'ax ve- 'oved le'at
 he lazy, rude, and-works slowly
 'He is lazy, rude, and works slowly.'

彼は怠惰で、無礼で、働きぶりものろい。

(26b) は一致型 PronZ に対応させた日本語訳であるが、一致型 PronZ でも「君が送ってきた学生の面倒を見るのは」のように主語を拡張解釈することが可能である。そして、その場合は (28) を後続させることができる。ただし、一致型 PronZ では主語が人を指すことができるので、PronH と同様 (27) を後続させる読みも可能である。

- (28) ... hu student mecuyan, 'aval ha-dikan sone oto
 he student excellent but the-dean hates him
 'He is an excellent student, but the dean hates him.'
 彼は優秀な学生だが、学部長が嫌っていてねえ。

(26c) は非一致型 PronZ に対応させた日本語であるが、非一致型 PronZ では拡張解釈しか許されない。すでに述べたように、非一致型 PronZ は主語が人を指せないからである。このように見てくると、拡張解釈を許すのは同定文の特徴であると言えるであろう。² ただし、例文 (25) の補語が比喩的で抽象的な内容であり文字通りの「首の痛み」ではないことにも注意しなければならない。「困りもの」「困ったもの」という訳語を付けてみたが、実際モノとしての実在感希薄である。そのため、叙述読みから拡張解釈を引き起こす同定読みまで幅広い解釈の可能性を有しているのである。

3. 4. 抽象的な同定

補語名詞がある場合には一致型 PronZ が使用されるのが通例であるが、Greenberg (2008) によれば、非一致型 PronZ の例もある。

- (29) a. yeladim ze simxa
 children.MSC.PL Z.MSC happiness.FEM
 'Children is happiness.'
 子供は喜びである。
 b. 子供を持つことは楽しいものだ。

ここでは補語が happiness という抽象的な名詞であって、モノとしての実体が希薄である。そして、女性名詞であるにもかかわらず PronZ の一致が見

に限らず PronH でも日本語でも枚挙にいとまがない。

- (32) (=18) student ca'ir hu / ze yecur 'aclan
 student.MSC young.MSC H.MSC/Z.MSC creature.MSC lazy.MSC
 'A young student is a lazy creature.'
 若い学生は怠惰な生き物だ。
- (33) (=30) iSun zot /ze peilut mesukenet
 smoking.MSC Z.FEM/Z.MSC activity.FEM dangerous.FEM
 'Smoking is a dangerous activity.'
 喫煙は危険なものだ。
- (34) (=31) Stayim ve-'od Stayim ze 'arba
 Two.FEM and-more two.FEM Z.MSC four.FEM
 'Two and two is four.'
 2 足す 2 は 4 である。

特に (33) (34) のように、抽象的な同定においては永続的な真理を述べており、時間を超越して成り立つことが明らかであった。

さて、典型的な同定文とは次のような例である。

- (35) あそこにいる男はジョンだ。

主語の「あそこにいる男」は指さすことができる実在感のある存在であり、補語のジョンも固有名であって豊かな属性を持った実体である。そして、主語の指示対象をよく観察してみるとそこにはジョンの属性が数多く見られ、当初は2つの別々の実体かと思われた対象物が属性を共有しているところから同一のものであることが判明する。これがありふれた同定判断である。ここで、もう一度次の例を考えてみよう。

- (36) (=9) ジキル博士はハイド氏だ。

ジキル博士とハイド氏が同時に現れることはなく、両者は重ならない（ただし、注1を参照）。ここでは属性の共有が観察できないのである。ある時空間においてジキル博士の属性を持つある存在が、別の時空間においてはハイド氏の属性を持つからである。逆説的であるが、この同定関係は明らかに時

空を超越している。両者が永続的に共存するという意味ではなく、時空を越えなければこの同定関係は認識できないという意味においてである。この同定認識を持つことはきわめて困難であるに違いないが、見抜かれたその同定関係は時空間を超えて成り立つ。すなわち、同定関係それ自体が時空間を超えたものであると言わざるを得ない。そうすると、Greenbergが次の例文に基づき、当直看護師とRinaとの重なりが一時的に過ぎないという理由で、同定文を総称文から排除したのは誤りである。

- (37) (=7) ha-yom ha-'axot ha-toranit *(hi) Rina,
 the day the nurse the duty PRON(3FS) Rina
 'Today the duty nurse is Rina.'
 今日、当直看護師はリナだ。

この同定文が述べているのは一時的な時空間における属性の重なりにとどまるものではなく、やはり時空間を超えた同定認識であって、(36)とまったく異なるところはない。すなわち、同定関係の本質は時空間を超えたところにあり、それは総称性を表すのに適している。そのため同定文は有標総称文の一つとして機能するのである。³

最後に、私が近年改訂しながら提案している「認知能力に基づく総称文研究の枠組み」を表にまとめておくことにしよう。表(38)は岩部(2021)において示したものと同等であるが、本論文においてはヘブル語PronZの詳しい観察を行い、対応する日本語との対比を通じて、有標総称文としての同定文の位置づけをより確かなものにした。

(38) 認知能力に基づく総称文研究の枠組み

速い思考 (システム1): 子供の認知能力 (危険回避・直観的行動, 社会的偏見, 脳の負担小)
デフォルト総称文: Striking Generic 可能, 複数形の使用, 冠詞の使い分けが (厳格で) ない (英語・ドイツ語・フランス語), Pron の使い分けが (厳格で) ない (ヘブル語)

遅い思考（システム2）：

大人の認知能力（社会的偏見を避ける論理的行動，脳の負担大）

有標総称文：冠詞の使い分け（不定冠詞単数，定冠詞単数，不定冠詞複数（フランス語）），量化（数量詞，法性），「**というもの・ものだ**」の使い分け（日本語），二重否定，**Pron**の使い分け（ヘブル語），**同定文**，エピソード的総称文

この表を見て気づくことがある。上段の「速い思考」が直観的，非論理的であることはすでに指摘されているところであるが，それに対応するデフォルト総称文はある意味で「非言語的」である。例えば，定冠詞の有無が言語によって異なったり，使い分けがなかったりすることがすでに観察されている。⁴そこでは，形式と意味の対応関係，とりわけ個別言語を超えた一般化という言語学的目標を追及しても仕方がない。

逆に，言語学的研究が成果を上げやすいのは下段の有標総称文の方である。一時代を画した量化理論による総称文研究も，Greenbergによるヘブル語 Pron の研究も，有標総称文の研究として位置付けるのがふさわしいであろう。Greenberg 自身，デフォルト総称文への目配りが不十分な印象であるが，それは彼女が言語学的な研究を目指しているためである。上段において「Pron の使い分けが（厳格で）ない」としているのは，他言語における冠詞の使い分け等に基づいた私の予測であって，現時点では十分なデータに裏付けられたものではない。Greenberg の論考のあちこちにそう推測させるような部分が見られるけれども，この部分のデータが必ずしも十分に提示されておらず，詳細はなお不明と言わざるをえない。

従来，総称文の研究が難しいとされて来たのは，上段と下段の区別がなされていなかったからである。Leslie や関係する発達心理学的研究が指摘しているのは上段の方であって，これが総称文の特異性を表していることは確かであるが，それが総称文のすべてではない。逆に，言語学的研究によって下段の特性はかなり明らかにされてきているが，総称文をすべてそれによって包括してしまうと，明らかな矛盾が生じることになる。総称文の謎とされて来たことの多くは，(38) のように上下に区分することで避けられるのである。

注

*本論文は科学研究費基盤研究（C）（2020-2022）「総称文研究における認知能力に基づいた枠組みの検証」（課題番号20K00681）によるサポートを受けている。

1. ジキルとハイドの同定はきわめて困難であり、それぞれの人物を個別に観察しているかぎり不可能である。スティーヴンソン『新訳ジキル博士とハイド氏』によれば、以下のような状況から同一人物であると推定できるのである。

- ・ジキルがいるはずの室内の様子がおかしいと感じて、中に入るとジキルの服を着たハイドが死んでいた。
- ・知人が、ハイドがジキルに変身するのを見たという内容の手紙を残していた。
- ・ジキル自身が、薬によってハイドに変身するプロセスを書き残していた。

最後のジキル自身の書き残した文書を読むと、常に善良にふるまうジキルの内面にはハイドに通じる邪悪な側面も含まれていたことがわかる。すなわち、ジキルの属性とハイドの属性は完全な相補分布ではなかったのである。ただし、これは両者の同定とは独立した別の問題に関わっている。ハイドは邪悪そのものであって悪事を働いても反省することはなく、悩みもない。ジキルは自分の邪悪な内面にも気づいており、そこだけが独立したハイドが犯した罪にも自覚があり、悩む。アイデンティティが2つに分離してしまっても、なおジキルの方が主体であり続けようとしている。しかしながら、徐々にハイドの側面が強まっていき、最終的にはハイドとして死ぬことになる。以上は、ジキルの残した文書によってはじめてわかる本人の内面のことであり、邪悪な側面を露出させなかったジキルと邪悪そのもののハイドとの同定を外の人間が行う場合には、属性が相補分布を成していると考えて差しつかえない。ジキルの邪悪な面とハイドの属性の共通性に基づいて両者の同定を行ったのではないからである。

2. 日本語には、うなぎ文と命名された独特の意味解釈を許す構文がある。

(i) 僕はうなぎだ。

もちろんこの文はウナギが発したのではなく、特定の場面で人間が

「僕が食べたいものはうなぎだ」という趣旨で発したものである。形式上は同定文であるが、その関係性は極めて間接的であり文脈にサポートされてはじめて可能になる。食事の注文の場面を想定することでいわゆるうなぎ文の拡張解釈がなされる。この文を過去形にすると拡張解釈の困難さは増すが、「あの時何を食べたの?」というような問いを想定すれば可能であると思われる。

(ii) 僕はうなぎだった。

同定文の拡張解釈の例としてうなぎ文を説明するのにヘブル語の PronZ を参考にすることができそうだが、過去形では Pron ではなく動詞のコピュラが使われるという前提があり、どこまで類似性を追及できるかは不明である。

3. ここで、同定文はいわゆる I 総称 (I-genericity) の特性を持つということになる。総称性は、文 (=IP) 全体として総称性を表す I 総称と、名詞句 (=DP) が種を表す D 総称 (D-genericity) の 2 種類があるとされている。典型的な総称文においては I 総称と D 総称の両方が現れるが、伝統的に習慣文と呼ばれる (i) では I 総称だけが現れ、エピソード的総称文 (ii) では D 総称だけが現れる。

(i) John drives to his office via Elm Street.

(ii) Potatoes were first cultivated in South America.

(Carlson (2019: 233-4))

同定文は I 総称であるが、同時に主語も種全体を表す典型的な総称文と、(36) のように個物を表して I 総称だけの場合があると考えられる。

4. 岩部 (2019) で論じたように、デフォルト総称文の形式は英語では無冠詞複数、フランス語では定冠詞複数、さらにドイツ語では定冠詞が随意的、と三者三様になっている。冠詞の定不定に関する基本的な用法がこれら 3 言語において共通であることを考えれば、この違いは言語学的には謎である。

参考文献

Berman, R. (1978) *Modern Hebrew Syntax*. Tel Aviv University Publishing Projects.

- Carlson, G. (2019) “Genericity,” in P. Portner, K. von Stechow, and C. Maienborn (eds.) *Semantics: Noun Phrases and Verb Phrases*, 232-273, De Gruyter, Berlin.
- Greenberg, Y. (1998) “An Overt Syntactic Marker for Genericity in Hebrew,” in S. Rothstein (ed.) *Events and Grammar*, 125-143, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Greenberg, Y. (2002) “The Manifestation of Genericity in the Tense Aspect System of Hebrew Nominal Sentences,” in J. Ouhalla and U. Shlonsky (eds.) *Themes in Arabic and Hebrew Syntax*, 267-298, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Greenberg, Y. (2003) *Manifestations of Genericity*, Routledge, New York.
- Greenberg, Y. (2008) “Predication and Equation in Hebrew (Nonpseudocleft) Copular Sentences,” in S. Armon-Lotem, G. Danon, and S. Rothstein (eds.) *Current Issues in Generative Hebrew Linguistics*, 161-196, John Benjamins, Amsterdam.
- Heller, D. (1999) *The Syntax and Semantics of Specificational Pseudoclefts in Hebrew*. MA thesis, Tel Aviv University.
- Heller, D. (2002) “On the Relation of Connectivity and Specificational Pseudoclefts.” *Natural Language Semantics* 10 : 243-284.
- 岩部浩三 (2019) 「総称文の謎を認知能力の複合性から解く」『JELS』36 : 24-30, 日本英語学会.
- 岩部浩三 (2020) 「総称文の多様性と認知能力の複合性—英語から他言語へ」筑波英語学会第41回大会 (2020年11月28日), 筑波大学 (オンライン開催).
- 岩部浩三 (2021) 「総称文の多様性—ヘブル語と日本語データによる検証」『英語と英米文学』56 : 29-56, 山口大学.
- 和泉悠 (2016) 『名前と対象—固有名と裸名詞の意味論』, 勁草書房.
- Jacobson, P. (1994) “Binding Connectivity in Copular Sentences,” in M. Harvey and L. Santelman (eds.), *Proceedings of SALT4*, Cornell University.
- Leslie, S.-J. (2008) “Generics: Cognition and Acquisition,” *Philosophical Review* 117-1, 1-47.
- 永野隆童・上野貴史 (2022) 「コンピュータ文に出現する代名詞要素—アラビア語・ヘブライ語・ロシア語・ポーランド語の場合」『ニダバ』51 : 41-58, 広

島大学.

Sharvit, Y. (1999) "Connectivity in Specificational Pseudoclefts." *Natural Language Semantics* 7-3, 299-339.

Sichel, I. (1997) "Two Pronominal Copulas and the Syntax of Hebrew Nonverbal Sentences." in R. Blight and M. Moosally (eds), *Texas Linguistic Forum 38: The Syntax and Semantics of Predication*, University of Texas Department of Linguistics.

スティーヴンソン (田内志文訳) (2017) 『新訳ジキル博士とハイド氏』, KADOKAWA.